



蓑太鼓句集序



老師 蓑句集を凡六百余章 明知  
六の年の中 文肆のものあきまらあり  
りまの吐目是をうかぬりて 梓行せり  
其ころの吟を師いさのあつらへし 時  
行脚乃おろし ちまよりの花更科の  
目をけしめ 各々は白も世の人の  
耳の中とある夫よりけり 草庵乃

夜雨裏苑の枕乃上猶又ばめり  
もれりるもの扱 あらよいも例は  
句帖もあつりやかしつささるる  
彼り心おるし百句二行五十句  
とめりるあも魚魯の誤おつり  
あつり振る亭三駱あつり是を歎  
此もつりさのちあみりあの友垣小  
雲はつりて七有糸章一且文章を加

二遍とあつり適あつりつり  
のこつりやあつり予けあつり老師とあつり  
振るさつりつりあつり乃あつりあつり  
こつりあつり金あつりの五文字錦繡の七文字  
いあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
あつりあつりあつりあつりあつりあつり  
吾嬬道の宇万巻あつりあつりあつりあつり  
あつりあつりあつりあつりあつりあつり

二  
こゝろのあはれとあつた物うらなひ  
もと免神の歸り老師に梓の  
あはれうらなひと世の人こゝろを  
あはれとまゝ人何れも老の力  
や免れ角あつたあつた  
うまゝ本志つゝ容膝堂志寧  
その事を志し序とす

一  
あつた物うらなひのあはれとあつた  
みづのあつたのあつたあつた  
のあつたのあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつた

あはれもつらきものぞきよきものぞ  
しるすもつらきものぞきよきものぞ  
あはれもつらきものぞきよきものぞ  
しるすもつらきものぞきよきものぞ  
あはれもつらきものぞきよきものぞ  
しるすもつらきものぞきよきものぞ  
あはれもつらきものぞきよきものぞ  
しるすもつらきものぞきよきものぞ

あはれもつらきものぞきよきものぞ  
しるすもつらきものぞきよきものぞ  
あはれもつらきものぞきよきものぞ  
しるすもつらきものぞきよきものぞ  
あはれもつらきものぞきよきものぞ  
しるすもつらきものぞきよきものぞ  
あはれもつらきものぞきよきものぞ  
しるすもつらきものぞきよきものぞ

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Small handwritten mark or characters at the bottom left of the page.

Small handwritten mark or characters at the bottom right of the page.

一 句は枕を〜作〜〜〜一 睡乃  
 うらふ花兒蝶の夢を〜あも  
 あひの心〜あひの心〜あひの心  
 の〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

了 昭五年春 卯 卯 卯 卯 卯 卯 卯 卯 卯 卯



夢太句集春之部 二編

歳旦

木造より燈燦も掃は花の春  
 蓋とれハ象門田之を川 礎  
 河造石れ志事と秋の〜初 礎  
 門〜〜〜〜一本よ〜い〜春  
 海〜造〜あ〜心の家〜戸の春  
 元日〜佛法い〜〜は連乃外



句集上

一

半馬如 拘喰ふ喜や 氏の巻  
夕暮もよー 灯如 卷る 晝  
氷より先は流るや 古法曆

古降

元月や 取らぬ人の言 軒

川井素白子昇進志願ひ一  
柳の冠けくを画くふ小教白  
せりと河原も道ハ

初春や 人の冠 蘇り鳥

象沙夷登先所嵐雪より 傳來の点  
漢連中雨窓の多たよりのせよと  
結ふ実樵夫の泥は 浪の落るは  
たふひあつた松は 旭に朗なる千  
不易の姿を机上の言 越小寺  
試み侍りし

くち 越小寺の雪の ちり

乙未の春中華程淑南陽湯の客  
句解はほくくよみまの文章且絶  
を



勝は其書との風流はかゝるに因りて  
眼より遠く耳に好れし人少なきの如  
されば交万里を隔て大座の月を堂に  
むすぬくよき是を代に道通よ戸  
内は女園の如し一好し

主路と一不見ぬ友の如し初産

草庵

万葉よ柱ありては草も樹も

白馬津

系歳を帆とて舟一舟

市廊

きよと好子や月の中よりあつと

あま

ほくくく枯世を度り若菜系

夏跡より七く所由き雪守より

南浦

あまのくく砂かたよりる破る菜

睦月何れ免者まろく人を悼く

己人乃月よ先摘む佛此座

鶯

常や佐御此切火の報候者  
くくひ守の人なふ烟よを喜ば  
美多し中志のよ紙衣の立居  
中を飛守の白雪會ふく初喜が  
常や何れと悔くもの枕乃處

訪隠者 山中無曆日

常や 庵ハうまぬ月日星

梅

行よりハ多折流もむ月と梅  
百草乃 雪よめくをそわ梅の葉  
朝の初梅や赤燭の消え道  
人柄の梅よ身よの何れ  
伽羅くと啼く葉のあはれ

ちふ梅より増賀の瘦となく  
冥へ魚記形ともしふ梅の花

不審公あり

文好む香あり弓河と月と梅

外龍梅二句

雲霞や 澄々時ハ 津乃 葉  
きののけと 梅の 花  
家吹よのひあゆま

梅よ葉ハ 女と 見と 匂し 香り

芽時り 柳枝の 立ちあ 秋の 葉に

みよし 柳ハ 葉と 梅と

杉田梅一見 詞書略

葉香り 後ろや 帆を 船

手杵を 花並に 似せし

梅 ちよひ 兔の 杵や 月と あり

芭蕉翁の 左右に 十哲を 画し

梅十の枝接穂の幹を露に

亀戸聖廟

先通風の甲斐をえぬ梅の月

削掛

我門と削を多紫甚く白

柳

屏より木ハさし雪なつし柳の

木深きて續のささゆり柳系

竹添多幹を吹くはるか

紙の花生りよ長き柳の如

下庵乃如麻河一なる草に

昭和九年二月廿九日 京都府  
河原深川を多野原の枝に

継梅を造りしを多下梅に

きのりぬ枝逆る風を多

春雨

系抱のいとハまを道原春の夜  
居風呂此中て爰なるや春雨  
はる多戸梅紅より休より

蜜川

宝曳戸新も押あふ睦月  
ほく川や巨魁よすもの妹はを  
宝那よる小跡の町よせもよ

霞

呼々たる路やあすも乃裏表  
浦人の中にあはく産う南  
峰終れ湯よりあふ流りれ

薩埵峠

蛤乃うとあはせさうんえ小

演名橋回跡

橋より見えりや演名の横産

松花

夫より老しきより松に森

夾月

二之若離子満ちり月

志如く先や帆ハ見えたり腕舟

夫婦しそ屠獲す小籠月取

紀川

水上ハちり地をりるる水

白奥

舟の陣の巻よみ居るたり或人の  
許より夜りの覆とてけりやうなる  
船のりきと

あゝ奥や十ちり二十と指おむ

白くしよ細代あやを恨がけ

椿

己よ多結ぶ果うえり椿の那

活下木の梅よありし向道とま

風中

あつ時風しそ思ゆきふ中

春風 品海ニ句

江戸向ぬ帆はなうも春の風  
帆柱の帆のしれり春乃海

春水

さゆふまじきながいしちやあまのち

陽春

くま河くち古田を河より水乃上

雲雀

世のふらぬ時おとろくくあを雀  
筋遠く吹上りしちりく那  
来して晴方をと上る雲雀は  
那河一不弱の跡あふのを雀

菜花

昼吼る大舟一菜花の空乃奥

莖

古草花とて終くよすまは

初年

を川平や女もすける梅百社  
初年や御城の太鼓幹とす

二月堂

水取や漱くれわらふ世あり

涅槃

涅槃舎やあまする人も時枕

顔色りぬくしぬる之涅槃像  
祢をし舎や画よ先あまる夕鳥

悼金春十三世即應禪休居士

あしづや終の薪乃能舞臺

雛子

松の葉の琴柱をひくや雛子を  
不海くくと央る岨ありさの芭

芭



はとくくやちふ楊屋北捨河ら

高跡

乙島の志々ぬ新あり英の院

帰序

己あゝうやをさき世あり海原

蛙

月一海や連々そと啼くを法

半弓に頼追々かす鐘の音

細代家を女のこ顔より啼蛙

蝶

一見法毒くくえも紫蝶かへん

秋まきの身を風をく胡蝶は

舞て所々ひくハ草人あゝ胡蝶

花りと原蝶より遊月夜ふ

春の里

捨鉄より日水より水の行旅哉

嘯〜々如漕つ運る夾旦の如

若帖

點尼枯た月を水あゝ女子漱也

鳥此巢 尋隠者不遇

多の巢戸錠の清つ〜草の庵

雛

い所雛の端指し飾連巻よ月

き〜ちり如く雛よ生るる桃梅

帝ひあや漏垂若の立す〜

虫ほ〜れ末摘花や若雛

傾城の座を下糸や雛飾

或法巻寺よや〜り事

籠の月よ行〜き〜花帽子

桃

山里や桃よ撒〜る塩は〜り如

滑〜り〜里燃〜る人〜桃の若

夕干

友々すむんくや夕干將  
城外の鐘ハツらと夕干將

漢村

海士の露や吾和布干只波遠

か代

出代乃おもしい捨とや寺界

花

入一やと人の海もあ花の奥  
森ももさくさくは道の秋に  
昼迄もあけり、森北夕日如  
酒提る六月の巻乃先酒じ  
あもてりやうく花のあけり

東叡山清水の橋ハ異ふよりこれ  
あけりして流人の巻ものながり  
去年の秋片枝吹おるうか  
とに咲か下遊りて

聖分より訪をて御一巻の法

江都十字街

花よ酒汗しそ牛の夷月之乳

石山寺

花多法六十帖や壹二月

西行の賛

白くは猫も捨りまむ乃旅

昔のまを成庵の古地より振出り

朽木より彫刻する木像の厨子より分枝  
乞ひし

木れらとに一人ハ巻の舞哉

梅

於處や花屋くを江戸梅

裏んきハう振返るはさく

本隠れ多如き掃眠一山梅

山田あき

太く此日中千金の伴契極  
於嘉より乃毫々と

山寺

下馬をえく極にくき山海  
爰よりあはくくひの日如

上野

折せなを襟の雪中山

東叡の夕陽のあけとく

希の御氣地のあけを系

今時分泊屋戸控ら舞夕極

人喜にくみて真ハさる極

雨中

傘はくくくくくくくく

悼万助

我よりわりの友あり万助と  
の壺子ありくは威の壺子  
とあり此春より膝より

来りて終る半日毎に閑るなり一拥  
あし支門より教養ひきほけり冷を  
多是所一入るより机の座よりふきこ  
筆をゆけ水入のあしら出る所  
坊とれは論ずれば又彼にら至る  
好一終日そのり半釋破の必得  
をよまらむいがる魚一布袋長光乃  
稚子を也一きぬい一も宜なる好  
将との器王戎の眼きしる池也一也  
河の流を一えさぬも短き也

く人の白を唱印との名をきく  
なをとあやほるる舞妓一の毎ら  
せらるる無ありて春の目れ水き  
うれうと先は冬夏の日乃きえ  
くく記もあ達うたぬに凌ぐ紙と坊  
齡ハ十り一は毎くされとを交る不  
水の滞さるる真の志さうて涼  
し一さあを去年の暮正月十二日  
の夜より祈らばく玉とほひ  
顔也を瘧疾のあくさあかなる移

来りて若しき座に倒きゆぬ  
 他トく神よいのり佛にありし  
 魂の結を絶つむるを結ひとむ  
 とあまふくく父母の公徳よとむ  
 海の深きををきく探るふ似る  
 うふい事なきのしらぬも我名を  
 いひあふる井好く高世いなる路  
 ありともや新志しひく想へしあや  
 法あふも何々の年の朝たありし  
 眠く如煩童子と印しひの紙は

竹を止し鳴存せりや常のまはひ  
 舟を長オトヒたる半のく好月海に五十年  
 の春秋を只思ふ出る行ふよ尽る  
 といし壁障子よ秋まの昔の跡し  
 記念うとや書も書きしと長喃子地  
 嘆息もほしおのりけくこの  
 いやまある流生の五月百日の目殺し  
 なるぬよりく彼はほはよ睡くまは  
 好ましく人く法草のむし法まは  
 とうまをま向物とて黄餅探る

まのふ夢うたへみまのふまをまの  
はまをふあはれを句くのほかに  
うたへ

魂ふまはるつふまの操人

葛城山禁 二句

岩橋北を操る一徳満堂  
操れやふまのふまを句くのほかに

海棠

海棠のふまをふまを句くのほかに

蚕

蚕のふまをふまを句くのほかに

友

友のふまをふまを句くのほかに  
藤はくや藤はくやのふまを  
はまのふまをふまを句くのほかに

蛭田



式座のうらハ記さぬ海や友の花

傾廓

まぬくや折も少錫より紅き髪

暮夜 旅行

清滝小菰くる妻は隣に

八幡

出神の矢より紅きやとり舟

後櫓とくはく春の別は

夢太句集夏之部 二編

更衣

友来ぬ人より紅き袷

袷をぬき引きよきあは

伴装をぬき紅き日や更衣

衣より風を巻のふりか

青簾

新落く水の覺りきすん

郭公

け鳥の長口をききし時  
えきしはぬきしはききしは  
形ぬしと夏れきしは  
お苗の小蓑をききしは  
子規禰子のききしは  
志のしききしは

神宮山

ハツの耳あはれききしは  
山癖はききしは

鼓ヶ嶽

山麓はききしは

ききしはききしは  
ききしはききしは  
ききしはききしは

ききしはききしは

牡丹

炬を石むす牡丹ハ御座り  
三

杜若

かき川を流す橋を石のくま  
橋を石むす牡丹ハ御座り  
人々此處ありし杜若

義仲寺

先旅乃一字手向むす川乃女

灌佛

大佛の隈く目あり卷御堂

難

是てしり難ふ死す此所を以難  
進上の機軸（東の深初は分  
取松真尸あり此所を以難

新場を以り

此の山を以難挽りり夕景山

千本松原

海を介松奥迄かり木内りれ

題阮籍

有りて喰ふ下人なりや見えたる難

芥子

荒海をかりえて芥子の嘆より

芥子嘆して戸城をりいり浦屋に

尼はゆるる女はくちきん

芥子すくし小町果も九十九髪

松島杉櫛のし治千位茶を茶を  
人々見送るけり

日やけえよ帰るん釜乃鏡山

采女の盃ハワリ舟と主席のしは  
けりとり櫛櫛櫛の椀あまハ

とらあちり新茶も嬉し母後山

麦搗

およひ三條の櫓より病て笠をとる

河風小君いささしきまふ又麻の束思ひ  
 ありききくすかたくり君い源妙の  
 ききくくあき思ひまききききききき  
 名とぬきおはけ思ひつれの時にはきき  
 人の作もいあききききききききき  
 れ中をりひ或はま統の統をのりき  
 をききききききききききききき  
 けりきききききききききききき  
 けあきききききききききききき

麦秋の源妙の君い白妙の

翠見亭

老を志系卯月を志の巨徳の

若葉 夏木立 下園

里北打を妙くみき雨の形紫の  
 夕雲の嶺崎の如くきききききき

那智山 秋泊

山寺の秋をききききききききき

富ヶ世

友木を吹矢の湖をさすはらふ子

東寺をさるる海濱のほとけの本

如き捨つる幸なき思ひおこ

造りぬふしう法はあまき友木を

大坂川口

帆柱や難波を浪の中夏木を

壱山壽梁子亭

公舟も馬場一径日蓮上人の棟札

其時の家居弘長の前より今なほ

沈真の矢ふか〜次風破地着の馬ひ

な〜今年五百有餘年じ〜ともみも

いふく所のと詠をんも叶殿のまふ

如魚一

棟札も久〜ふ代々や夏木を

新ヶ崎大如亭

題一樹

友法も葉よ〜り〜り〜り

身延

くくい寸谷

下園の上小橋あり鳥はく名

筑波

胎内溜

下園はありて其より母の意

おれく

北野の鳥もくもくあつて筑波山

短歌

人をよのやじとよの夜の時なりけ

筆

牛乳子や朱簾ちまけく細の糸

かほほり

端幅やむりて法京の捨麻

苔の花

登龍り小橋の柳空や苔の花

花柳

先小柄参りて其より春柳の

冬神元々志きり小あつく山海

端年

檄之川部小白ふ志きり小那  
川風より清く大庭系縁之れ  
響子も解りたむ毛福小  
帷子也茶階之系人通也

葵系

神風をまじぬ葵系一葵草

青嵐

鹽洞乃如色之吹也青嵐

青嵐一如色之吹也青嵐  
形は之を抄る今の色即持筆を  
青嵐

望成庭州一青嵐十菊家

翠月雨

少くも秋や月星と啼きも来次  
六月夜多也色不二也思え如之



きみはなほひくはるるの 席の雨

二州橋

又うもや傘をさしてはる橋河ら

宇治

龜山殿の池水宇治の里人哉  
ゆりてまひてはるるもなほ

あはれきや子依と造る水車  
入梅晴の河を流るる松の松

名月如鏡の如くも 翠月周  
おしあふも睡啼の又月書

深岬島

庵屋と舟ははるるや深岬島  
寺河りの京もは信を深岬島  
庵丁ハ路よりうあましうとる

旅中舟の大雨と舟の雨

二州まで舟の雨は 雨の舟

梧桐

一海う月も如き梧桐の  
山川を湯よーてりる  
穴ハ皮中水ちゆく  
梧桐の月如き

堂

海なる舟の上福白舟の  
舟一さや  
舟より堂廊より  
なしく堂は

追ひ来々息すき  
舟をきく  
追ひ来々息すき  
舟をきく

車胤 夜学之贊

堂一う一字く  
如光う耶

回植

五六尺月長  
早乙女尸  
回植  
緑川の

ひしきしきく之味嫁入よ田植唄

歌 伊智山田

軌あれも養あり爰の八百萬  
いとういお世や軌一秋養二寸

致を

爰かいふまゝの孫女里の致を  
やうの家のはくさや致を草  
書るより暖はうき致なり致

蚊を火口燈片一の香をなを  
横をり一致をのうと名月秋形  
月代中朝のりる蚊なり致

並山旅泊

身深子より消ゆる思時うけや  
如方を謝して

物の因乃厨釣夕くおぬ  
客をくつ明はる惜む月夜は

夏料

河ありて下り水と上ゆく也  
実方の日く終と皆し巻くは  
紫陽花の中葉の赤花沈むる

大車老母七回忌

何之ひく口むくの世に好縁會  
昼形の中思ふる事く乳酒廣明石  
夕鳥やうせくと暮るに星印の

夕う衣やあふあふ白紙上  
山百合の中葉一葉の立所  
か川草の中根ハ道ある捨河あき

葛の松原松原松

世帯中人の葛の松原と呼ぶ  
しと姑一とくは干時保元二年  
二月十七日持僧於學英生年四十一  
申ノ刻終るをとりぬと之の松れ  
本を削るはれしといふ跡をよ

湖上より弓矢入る

跡より多松ふ怒りり葛の花

道成寺

凌霄軒入桐撞くぬ思ふ

六代由緒数草回跡

沿津千本松

竹中稜内一の屋て百合の花

北堂の松さうりくくそお好の国

寂上のたよおむく月棠を送る

稚一也んく色よ紅の舞衣

小金市牧

群豹の髪も夏巾の茂り

常州竜ヶ崎頼政塚

世武字治と脱もむ君り護子

筑波山行

行津乙多をを毎のむふ平海

岩のくを大横をひり

光廣口

淡線や岩の頂をちりひき架

連

夕ぐれの道に群集のうらみ

水鶏

印のくまの川田の水雞が

園田川の水鶏をよみ採る

風

水鶏をよみくまの川田の水鶏が

風切あやねのしそお糸母の顔  
酒より風の海を渡る日

風名月

昔伊勢國の居士路の廣次よけい水  
月の星が清光を照らす風名月  
雲をよみくまの川田の水鶏を  
よみくまの川田の水鶏をよみくま  
向を進ませく杯を注ぐと新編鏡も  
よみくまの川田の水鶏を

正月如あゝい満くやん此法水

晒

みとら子の曇る雨一晒ふ  
叶あゝ女のあゝあゝ一晒

氷室

赤老も氷室くちを覺るる  
崖原の紫花あゝい雪一氷の真  
氷室家乃梅よあゝあゝ下涼

氷室寄く日更峰下何系の許り

三寸姑石よをくく不乙の雪

蟬 蝸牛

年底一蟬ハあゝい蟬枕へ  
春中や陰をとくく春蟬の聲

大坂

鑑脱蟬あゝい松林御勝山  
い法代り半也蝸牛のくく巨貝

暑

けし路の條さく是よあしむ  
枯あや免はしりぬ新乃暑ふ

必觀亭

鉄炮も別道ハ眠——交百日

竹婦人

抱新やたくく始行あし路  
くま文苑の夢ハ異國の雪の竹

清水

赤お掘藤の里流清水あか  
住人も物あくを人ぬきあふ

川流

とくあぬ影も涼——清水流

初瀬

昔の下のあしむ

水は月志あし尋あしり昔の下

埴小島

あしむ  
あしむ



文覺の足洗ひ舞音唐衣

夏の月

石川や水を見よ夏の月  
夜の月釣鐘撞き好ひり  
賞より外よ流るる夏はる  
不重する候のちうらや夏の月

白飯

夕くらや日の照るを月あ

大和路

白雨や年や山越等よ吾君

蘇

夕暮ハ翹々揚る小蘇り如  
ゆふ終り今小蘇おの砂な

納涼

麦飯の播実かきすこし  
櫻くさる階のなりちや夕納涼

ちりくくよ別まきく侍事の涼也

西国

川風の人を澄るや夕暮しみ

三井寺 湖月楼二句

和声しそ鐘はく三井の納涼所

山くのありや涼し茶客も

涼しさや柳田く如く涼き

次しそ其の基菊河もぬ枕也

旅行

あししりや行先く(室上川

無名庵丈牒正秀正院三老の墓前

三吟の碑と涼し鳴き満

贈右友尼

諸の病行病より難髪を埋しひく

塚を築しとや風流偉縁印と

かぬ女翁より

涼しあや極楽も髪のは

斑石月原付ひく神奈川の都立舎  
 くの秋枕道ふ深戸川とかなら崎次  
 の瀬秘ちまらるり河ふあや——と  
 多きうれ作おろかお新うあう——の  
 屋の免をきうかなしと日かうふ登り  
 希りう迦夫もし樵薪屋の造お多れ  
 うに陀袋包の物の中より籠冊反故  
 引ちり——と河里とく持海里て見るよ  
 きの飛のりうせさるる探謀よ風籠乃  
 神如身うせ行しふがう森と

白浪如返——と涼——藤垣村

沙羅亭 俳園

荻市——と万里一條の鉄線屯

尋光——とせけ句を待て佛頂福孫

よ参り師儘なる候と——とあ

ち——とちまき万里一條の鉄線屯

尋九孫——と孫を待て是家門流

一園也是を踏破——と一句を吐きり

よのハ沙羅室中よ入る身を許さ候

佐幕守藤太

風涼——つぎふ園をまわると

右河 何素亭

枕香をりふふふ風の薫る乳

悼百萬

あ——ハ點眼腫より泣く三人古事  
知りし祝詞満よりききとて——を  
夢うらけうら楽毛ハ五孫の神を破る  
老杜ハ瘦るをそハけ老乃あやまらぬ  
ゆき魚——

句林——夏に皺面恋——唐麻子

七面山方丈

六月比羅——あつ園極裏に

泊瀬

六月流流世よりとまむ石身  
夏旅戸巻の飛らむけの中

梅素亭

爰に印のの樓ありききとてあや

之夢とありぬとの二万二千の虎をいすの  
 妙用をあらよもあら又車よはき  
 世を道すのぬらひやと何れを主人  
 柳糸半日の雨を降るよと机よ肘杖  
 うしよと雪月におもひを述れハ世波を  
 糸放すよとあらう船よゆれハ世  
 是よ名をゆらう一舫橋よいよ屋  
 手枕や夏はゆらゆらも 葵 船

墨子悲絲

縮織多干絲の機子くく

合歌

物りぬらうぬ青やゆらよの花

二学院

時きく如鐘よらつむ合歌のも

柳井

ありし井や糸やうき音の程  
 柳井や詠さるるあけの月

雲峯

縞鏡輝をけけりやその峰

好福

波の送りなりとや雲の峰

雲干

むし干や若れ好れもはる近

虫不しや及はるる武藏坊

信夫の里

け里の雲干中しりあふ

御後

画鏡雜髮頓

比ハミ 髪もりぬ夜所ハ

ちや 跡小夕雲中しり後川

夕集上

四十一

27  
28

